

# 黒浜貝塚国指定記念講演会

## 「黒浜貝塚の意味するもの」講演要旨

國學院大學文学部

小林達雄 教授

時：平成18年11月23日

所：蓮田市役所303～305会議室

只今ご紹介に預かりました小林でございます。

先に、黒浜貝塚の基調報告といいたいまいしょうか、黒浜貝塚の内容についてお話があったと思いますが、私はそういうものを踏まえまして、黒浜貝塚というものが歴史の中で、人間の歴史の中でですが、どういう位置付けにあるのか？それをちょっとお話させていただきまして、それから黒浜貝塚の方に、具体的に入って行きたいと思えます。

人類の歴史、人間の歴史と言うのは、ついこの間までは250万年前ですとか、230万年前まで溯ると言われていたのですが、その後、特にアフリカを中心にして、大体人類が姿を現すのが、アフリカなんですね。化石人骨の研究が進みまして、600万年に達したという驚くべき成果が上がった訳です。ところが最近ではさらに記録が抜きまして、おそらく650万年は硬いだろうと、もしかしたら700万年前に溯るかも知れないというところまで来ています。その意味するところはですね、結局、ゴリラやチンパンジーはわれわれと非常に良く似ておりまして、まあ我々の仲間にも非常に良く似ている人はいますけど、そう言う仲間と別れて2本足で歩くようになった。それが人の始まりなんですね。それが700万年まで溯るかも知れない。それ以上は行かないだろうと…。大体そのところが限界という風に見られています。

日本列島にもですね、そういった子孫がアフリカから出てきて、ヨーロッパに渡り、そして中国大陸に行ったり、それからジャワ原人で有名なインドネシア方面にも、人がどんどんどんどん広がっていきます。

その子孫が日本列島に辿り着いたという訳ですが、多分これからどんどん古いものが見つかるかも知れませんが、今のところ確実なところは3万5千年前ぐらいから、日本列島に人がちらほら動き出したというところは確実だろうと思えます。まあそれよりも前に先遣隊がどれぐらい前にいたのか？その可能性は充分にあるんですね。というのは、北は北海道の方面ではマンモスがいたり、本州のこの辺りでは、ナウマンゾウやオオツノジカがいたり野牛ですとか…、つまり今、私達が眼にする事ができない絶滅した図体の大きな大型獣（大型の獣）が群れを成していた。そう言う時代があった訳です。

彼らが日本列島にやって来たということは、（日本列島が）大陸と陸地で繋がっていた。それと一緒に生きていた人類はおそらく彼らの尻を追いかけてながら、つまり動物というのは食料源

な訳ですから、それを追いかけているうちに日本列島に入り込んできたという可能性は十分にあるという訳です。そしてその証拠がはっきりするのが約3万5千年前ということです。埼玉県内にも沢山のそういった時代の遺跡があります。

ところが黒浜貝塚の時代というのは、そういった最初にやって来た旧石器時代人の末裔です。たぶん一度入って来た人達が一旦いなくなって、もう一度「縄文人」と言う新しい集団がやってきたというのではなくて、おそらく旧石器時代人から血のつながりのある人達が、これからお話しする縄文文化、縄文時代文化の担い手となったと考えられます。それは、いろいろな証拠を挙げる事ができるんですけども、今日はその話はさておきまして、その旧石器時代、3万5千年前から続いていた人達が、大変大きな歴史的な事件を解決する事になります。それがこれからお話しする『縄文時代文化の幕開け』と言うことになります。

この縄文文化の始まりと言う大事件は、おそらく世界的な人類の歴史におきましても、最初にして最大の大革命というふうに言えるかと思えます。どの点が大革命かと申しますと、旧石器時代の始まりは700万年というお話をしました。それからずーと続いてきて3万5千年前に日本列島に入って来ただろうと、これが旧石器人なわけです。

そして、今申しました大事件というのは今から約1万5千年位前の出来事です。これを私は『縄文革命』と呼んでいるわけですが、何がそういった大事件という事を表す、あるいはそういった内容を示しているかと言いますと、旧石器人の生活と言うのは一口で言うと、あるいは分かりやすく言うと、サルやチンパンジーやゴリラと同じような生活スタイル、と言うのはどうなのかと言いますと、しょっちゅう動き回らなければ生活ができないという生活（遊動）なんですね。おそらく村を営んでいるという光景は物語の中では、あるいはお伽噺の中ではあるかも知れませんが、それはないですね。

それより今、縄文人というのは、黒浜貝塚もそうですけど、「定住して村を営む」これが大きな違いなんですね。この『遊動』から『定住』という此処に大きな差があるわけです。

この差というのはどういう意味を持っているかということについて、ちょっとお話しておきたいと思いますが、遊動的な生活というのは何故『遊動的』かということ、「朝起きたらまずお腹の空いた状態ですから、食べ物を獲らなくては行けない。で、食べ物を食べると、満腹すればいいんですけどまだ足りない。何家族かの集団で動き回っているわけですから、ある1箇所の場所で食べ物をあさって食べているうちに、満腹できないという事になると直ぐ移動して、満腹になるまで食べ物を捜し歩いて動き回る。」これが『遊動的』な生活という事です。で、満腹すれば昼寝をしたり、ぺちやくちゃお喋りをする。まあこういう生活なんですね。

もう1つその象徴的なのは、我々の生活や縄文時代の人達と違うのは、この『遊動的』な生活では、「食べ物を手にすると直ぐ口に持って行く」んです。鳥をちょっと思い浮かべてください。鳥なんかは手にする前に直ぐ口にもって行きますね。それと対して変わらない、手にしたら直ぐ口に行く。ところがこの（縄文）時代になると村から食べ物を採りに行ってですね、食べ物を採って「おいどうだこの食べ物は？木苺は熟しているかな？あー甘い甘い。」と言って、味見をすることはあっても、食べ物を採りに行った場所に腰を落ち着けて満腹になるまで食べるというような事、手から口へと言うようなことは一切やらなくなります。そう言うことは止めるんです。そしてどうするかというと、「手から籠（かご）に入れて、あるいは袋に入れてそ

して村に持ち帰る。旧石器時代には動き回って、食べ物に蟻のようにありつくと、直ぐに手から口へと食い尽くしてしまう。そうして余っていても満腹すれば満足して、お喋りあるいは昼寝そういった無駄な時間を過ごすということになるんです。

ところが縄文時代では、その前に旧石器時代にはいつも動き回っていますから、ここには家族、赤ん坊もいれば、自分を育ててくれたお爺さんやお婆さんもいるわけです。お爺さんやお婆さんは若い頃は足腰が強くてだんだん弱くなってくる。そういった沢山の仲間（集団）を引き連れて、働き盛りの若夫婦は先頭に立って食べ物を採るわけです。というふうに解説すると改めてお分かり頂けるかと思いますが、『遊動的』な生活というのはそういう内容だったわけです。だから、その食べ物を食べ尽して足りない。また動かなければならないという時に子供はまだ「ヒイヒイ」言っている。「じゃあ」と足早に行こうと（移動）すれば、子供の手を引いたり赤ちゃんがいれば抱いたりしなければなりませんから、なかなか大変です。自分の身一つで動く時とは違いますから。そして更に足腰の悪くなったお爺さんやお婆さんが足を引きずりながら、木の根っ子につまづいたりしてるのが、後ろで分かっている、「大丈夫か？」なんて言っていられない訳ですよ。早くヒモジイ思いをしてる子供の面倒をみななければならない。子供が優先される。だから旧石器時代の全体、家族がですね、動き回るという事はそれだけ大変なことなんです。

ところが、定住的な生活をするようになってですね、もうお分かりでしょうけれども、老人と子供は村に残しておける。そして働き盛りの若夫婦やお手伝いの出来る子供を連れて、食べ物のある所に行って、手に取ったら口に入れるのではなく、それはもう味見ぐらいはやります。けれども作業、仕事として食べ物を確保して、籠に入れて持って来る。その間お爺さんやお婆さんは孫の面倒を看ている。こういう図式が出来上がるわけです。全然違いますこれは…。

そしてここで、食べ物を採る。手にいれるという時には、こういう働き盛りの人達が子供の面倒もお爺さんやお婆さんに対する労り（の面倒）、いろいろな事をしなくとも良い、それ（食べ物を手に入れる事）に専念できる。だから効率良く食べ物を確保できる。効率というのは時間ですから、旧石器時代までは食べ物をしょっちゅう漁って、動き回って、そこで食べ終わったら次のものはまた動かなければいけない。それが縄文時代では効率良くやって（採って）、帰って来て沢山採れたら、それを蓄える事ができる。穴倉を掘ったり、倉庫みたいなものに入れたり、特にこれの重要な事は、短時間あるいは短期間で大量のものを手にいれる事ができる。これについては縄文時代の生活は、非常に有効かつ効率が良い（効果が上がる）。例えば、川に鮭が上ってくる。鮭は取りつくせないほど獲れるわけです。縄文時代には採るわけです。旧石器時代には、取ったやつを口に入れているわけですから、満腹したらいくら上ってきても眺めているだけ…。「お一元気よく上ってるな！俺はもう満腹だ！」と言って眺めているだけでしょ。いっぱい取っても腐ってしまうわけです。冷蔵庫があるわけじゃない。

ところが縄文時代では、鮭が獲れば鮭を、貝を採りに行ったら貝を、沢山とって持って来て、そしてそれを今度はその日の満腹（腹）を満たせば、残りは乾燥させたり、それから穴倉に入れておいたり、燻製にしたり、時には発酵もさせていたんですね。そうやって、余りを残して、今でいうと冷蔵庫代わりに穴倉に溜め込んだり、そうしたら、ちょっと雨が降ったり、

あるいは台風が来たりしても、わざわざ出かけて（狩りに）行かなくても良いんですよ。ちゃんとって（保存して）あるわけですから。だから旧石器時代には毎日動かなければ腹が空くだけです。だから、外に獲りに行けないときには腹を空かして我慢をするだけですが、縄文時代には悠々と食べられる。こうゆう生活ですから、そうするとこうゆうことが起こるんですね。ここ（外）で効率良くやって（採って）、ここ（ムラ）へ持って帰って来て、蓄えておいて食べ物を計画的に消費していく、一年中安定するんです。これはものすごい安定になります。そうするとそれまで動き回っていた時間は、全部余った時間になります。その余った時間と言っても時間の中で自分達（縄文人達）は生きていますから、その時何するかというとそれはですね、旧石器時代は食べ物を食べるだけの時間だった。動いている時もそうであった。ところが縄文時代では、文化的な方向に時間を振り向ける事が出来るようになったんです。だから縄文文化というのは、どんどんどんどん充実していくんです。

その充実ぶりも少しお話しておきましょう。とても充実しています。その充実ぶりも一言で言うと、「本格的な農耕を持たない、古今東西の地球上の集団の中でですね、『縄文文化』ほど内容豊かで充実した文化は、まあ他に例がありません。」それぐらいのもの（高さ）です。もう優等生ですね。で…、マアマア対抗できるかなと思うのが、太平洋を隔てた対岸にちょうど位置する「トーテムポールを立てた人達」。名前ぐらいは知っているでしょう。トーテムポールも何かでは見たことがあると思われます。あの人達と良い勝負なんです。でも、縄文文化の方が実は凄いです。これからお話ししますが…、彼ら（トーテムポールを立てた人達の文化）も凄いです。あれだけの文化を造るんですから。そこでですね、文化が豊かだとか、充実しているとかをなんでもって測る（量る）か？というと、文化を高いとか低いとかいうふう勝手になんか評価できるものではありません。それが文化というものです。技術は高い低いありますよ。文化はそうじゃないんです。けれども、文化もやはりそういったいろいろな要素を、いろんなその要素というものを持っていて、その要素が文化というものを創りあげているんですが、「お前これもっている？」と言って出しますね。「鏃（やじり）持ってるか？」と…。向こうも「それぐらい持っている」。と弓矢を持っているという意味ですね。ただ、（鏃の）形の良い物を持っているんじゃないで、鏃といえば弓矢を持っている。向こうも持っている。こっちも持っている。「斧は…？」「俺だってあるよ」。斧というのは木を伐採したり、木を加工したり、色んな仕事を（斧は）します（する道具ですが…）。「そうか、籠はあるか？」「あるよ」。これぐらいの種類あるよ。おおそっちも凄いなあ。ほとんど俺達と変わらないぐらい種類があるなあ。と良い勝負をしてくるんですよ。「錐（きり）はあるかい？」「錐はあるよ」。その「丸木舟はあるかい？」「俺だって丸木舟もあるよ」。と勝負がつかない。お互いにこうやって（出し合って）…、だから「トーテムポールを立てた人達」の文化というのは、縄文文化に匹敵するというのはそういう所なんです…。もしかしたら縄文の方が一枚上手かも知れないというのは、こう出したらこう出すと…。向こう（「トーテムポールを立てた人達」）はもう手が無くなるんです。その時持っている『縄文文化』の手が『土器』なんです。彼ら（「トーテムポールを立てた人達」）は、あんな凄い文化を持っていながら、『土器』無いんです（持っていないんです）。縄文は、縄文文化といえば、1つの象徴として『縄文土器』が想い浮かぶほどに土器を作る。作るだけではなくて使用して、その使用によって効果が上がってくる。そういう土器と

の強い関係を持っているわけですね。それ（土器）を持っていないんです彼ら（「トーテムポールを立てた人達」）は…。だから相当の差が見られますよね。技術的にもそうだし…。それにまつわる文化的なことも違って来るわけです。

それだけじゃ終わらないんです。「エーお前凄いの持ってるなー」となります。その次に、やおらこれは…と出して出すのが「漆です」。「『漆』とは『ジャパン』」と言う名前で売られているほどです。世界に通るんですね。日本を代表する技術です。それ（漆文化）は縄文から始まるんです。そんなの持ってるわけがない。今まで縄文の漆はですね、おそらく中国から来たんじゃないかと…。今でもその可能性は否定できないんですけど。しかし、どんどんどんどん古い例が発見されています。今では縄文時代を6つの時期に分けているんですが、1万年以上続きますから…。1万5千年前からですね、米作りが始まる弥生文化の今から3千年前ぐらいまで、1万年以上続くんです。この1万年以上の時代は長すぎますから、私達は6つの時期に分けているんです。1番目、2番目、3番目、4番目…。で…。1番目、2番目。その2番目の時期のですね、一番お終いの頃にはもう漆は出て来るんです。で…。今まで中国から来たんじゃないかと、中国大陸から来たんじゃないかと、考えられていたんですけども、お隣の中国の漆よりももしかしたら古いんです。まあまあ同じ程度と見て良いでしょう。今のところ…。(古さは) 同じ程度なんだけれども内容がちょっと違います。「黒目技法（くろめぎほう）」という実は、漆をより純粋な漆にしようという技術があるわけなんですけれども、今日本に勿論定着していますけれども、それはもう縄文時代から始まっているんです。中国大陸には（その技術が）ない時代、だからどっちが本家かといったらですね、内容としたらどうも縄文の方が本家かもしれないという有力な状況証拠です。しかも漆の木はですね、あれは漆の技術と共に大陸から渡って来たと考えられていたんですが、今は違うんです。縄文時代に漆の木がだんだん見つかってきたんです。そして、東京の1つの遺跡からはですね、漆の木が出てきてですね、そこ（漆の木）を「漆かき」をやっているんです。その痕跡が出てきているんです。だから、別に中国大陸の、中国文化の助けを借りなくても、日本列島の中でいろいろなものが始まっている。そして、その充実ぶりというのは「トーテムポールを立てた人達」の文化にも匹敵するか、あるいはそれを上回るような文化。私はこれを『東西の両横綱』と呼んでいるんですけども…。

なかなか強いですよ、縄文文化はですね。何故、こんな島国の日本列島にそういうことが可能だかということについてちょっと考えてみたいとおもうんですが、なかなか結論は勿論用意には出るものではないんですが、遺跡の数が多いんですよ。縄文時代の遺跡が…。日本列島全域にあります。北海道から沖縄まで…。遺跡の数が多いということはそのまま正比例して、これだけ多ければこれだけ人口もいるという風にはならないが、正比例はしないだろうがほぼ正比例する。遺跡が多ければ人口も多かっただろうと考えて、その目安は考えて正しいと思います。だから大まかに捉えればですよ、遺跡の数が多いということはですよ人口も多かった。蓮田の人口は今6,7万らしいですけども、皆さん関心をお持ちで知的な人もいっぱいいる。何故、そういうところにも感心が持てるかということ、それなりの情報が発信されて、蓮田市全体の活力といいましょうか？その中に皆さんがいるからです。それが全体の活力が沈滞していたら、自分の心も外に向かって開きません。反応しません。ところが、縄文時代には人口が多かった。だから他の地域と比べると非常に活力があった。今でも過疎地が問題になるのは、寂し

い。お茶飲み友達がだんだん少なくなると寂しくなるという事で問題になっているわけではなくて、人の数が少なくなるとそれだけ活力が失われるという地域全体の活力ですね、それがまあ縄文の場合はですね日本列島全体活力がみなぎって、世界中のその当時のですね状況と比べると、ひとときを抜いて活力があった。それが縄文文化の重要な要素になって（踏み台になって）、世界に冠たる文化を形成する事ができる。と言うことになろうかと思えます。それについては今や、我々日本人がですね日本列島に生きて住んでいる人達が考えるよりも、あるいは想いを寄せるよりも、もっと世界的に縄文文化というものは注目されております。ちょっと縄文について興味を持つという人がですね、あちらこちら、アメリカ・カナダでも、ヨーロッパ、イギリス、あちらこちらでも全部そうです。それはそれだけの内容を持っている。そこで実は、黒浜貝塚と言うのは、そういう中のムラの典型的なものですね。ムラというのは、旧石器時代には一切ありません。動き回っているわけですから。サルやチンパンジーがムラを作っていないのと一緒にですよ。ところがムラを作ると言うことがどうゆうことかという、今まで自然の中に身をおいて自然の中の一つの要素として生きてきた。旧石器時代はですね、自然的秩序の中に組み込まれていた。ところが縄文時代になると、ムラを営むというのは旧石器時代の（自然的秩序の組み込み）から抜け出て、そして自分だけの空間を自然の中からもぎ取るんです。「切り取ってこれは俺の場所だ」と握ぎ取ったのがムラなんです。

この革命は大変な事なんです。「縄文革命」ということは……。とにかく今まで自然の中にいた、その自然の中には見ることもできないような新しい空間を、その自然の中に造りだしたんですから。色んな小鳥が巣を作るというのは、自然の中に溶け込んでいます。秩序の中に入っています。蟻んこが巣を作ります。ミツバチが巣を作ります。けれどもあれを持って自然から離れて独立独歩して生きているなんて思わないでしょ。あれも自然なんですよ。人も旧石器時代には自然の中にいて、ねぐらを作ってもそこを離ればいつの間にか風雨にさらされて自然の中に溶け込んでいくんです。ところが、縄文時代にはムラという空間をちゃんと造りますと、今までなかったような、自然界にはなかったような新しい空間なんですね。この空間のムラというのは、人間が自然に対してですね大きく働きかけて、そして人間としての主張といひましようか？口だけではなくて自然をもぎ取ったんですね。こうゆう大きな意味があるんです。で面白いことにですね、自然の一角を切り取って自然と別れるんです。分家独立して動くんです。この空間（ムラ）というのは、自然の中にただ線引きしただけではなくて、自然的要素を全部排除するんです。自分の邪魔になるもの、生活の邪魔になるものは……。逆に言うと生活のために必要な施設をこの（ムラの）中にどんどん作っていく。家を始めとして、穴倉（土坑）から、それから共同の広場から、ゴミ捨て場から、それを全部この中に作っていくわけですね。だから、その（ムラの）中に邪魔な木があれば切って、とにかくどんどん更地にして、自分たちの使い勝手が良いようにやる。使い勝手良いようにというのは、今まで（旧石器時代）はそんな事はしていないんです。サルやチンパンジーという話は直ぐに口にしましけれども、もっと考えるとですね、イノシシやシカと同じようなレベルなんです。対等なんですね、自然に対しては……。そうやって、こう（自然の中に）生かされてきた。それ（縄文人）がちゃんと城（ムラ）を持つようになった。そしてここ（ムラ）に腰を落ち着けて、ムラの外の原（ハラ）の自然を利用して、つまりここ（ハラ）は食べ物がある。それからここには色々な道具を作るときに必

要な材料がある。全部ハラの中にあります。このムラの中から自然は放り出しても、周りには今まで身を置いていた自然的秩序はちゃんとあるような自然があつて、この「ハラ（原）」というのは、自然と、自然の中の食料と材料を利用するという中で、共生をするのが「ハラ」なんです。こうやってムラの中では人間同士、ここ（ムラの中）は人間同士の世界なんです。そして行動を起こす。つまりここで初めて『社会』というものが段々形を持ってくるわけです。旧石器時代の中ではですね、人間だけの社会と言うよりは、いかに自然の中に上手く自分たちの身を置いて、そして生きていくか。ということで自然と一体化しているんです。イノシシやシカと一緒に・・・と。

ところが、今度はムラの中では自然を全部排除して、人間の人的社会を作る。これが事情に重要なところなんです。ここで面白いのは、「堅穴住居」。彼らの住まいとしては、今まではしょっちゅう動き回ってますから、寝起きする建物に時間と労力を一杯注ぎこんで、そして家を作っても直ぐまた動かなくちゃいけませんから、だから、その建てるのも、家も非常に貧弱なものになったんです。それこそクマの冬籠（ふゆごも）りの巣穴に毛が生えたようなもの。だって、どうせ捨てなければいけないんですから・・・。ところが、ムラの中は違います。ここでずっと定住するんだという事が決まっていますから。とすると家を作るのにも、徹底的に時間と労力をかけて、そして半永久的な家になるべくですね、耐久性のある家を作ろうとするんです。そうゆうものがずっと出来ている（縄文時代には・・・）。その中で彼らは、どうも周りを見ると、ムラの中というのは、ムラの外のハラとは全く別の風景・景観がどんどん出来上がっていくわけですね。人工的景観が・・・。その人工的景観に自分たちが生きる事によって、外のハラと、ハラに生きる動物達とは俺達は違うんだぞ。と改めて意識する。そういうきっかけを得たということです。というふうに考える事ができる。これがですね、もはや俺達が動物ではないんだぞというそういう意識に繋がった。と私は見るんです。今までの考古学とかそういうものはですね、「やあ、村がありました。こういう村の中には堅穴住居がありました。手をつないで輪を描くような、そういう配置の仕方であつた家があつた配置されているんです。」と言うような話だけで終わったんです。

私はそこにもうちょっと、縄文人という人間ともう少し向き合ってみないと、いう思いがするんです。その時に今お話したように、全く新しい空間の中に身をおいた時、それはその前に自然の中で動き回って生かされたことと、全然違った状況の中で自分達が抜け出した自然の中には、かつての自分達と同じようにシカやイノシシ達は生きている。それと比べると俺達は全然違って来るわけです。そこで俺達はもはや動物ではない。という、言葉を変えて言うのですね、『人間意識』を持つことが出来た。そうゆう重要なきっかけはですね、旧石器時代にはなかった。縄文時代になって入ってきた・・・。そういうものが生まれてきた。そういうふうに考えると縄文時代、あるいは縄文人と私達の関係みたいなものというのは良く分かります。「人（ヒト）」という言葉は当時どう呼んでいたか分かりませんが、もうあつた。縄文時代に入って生まれたんです。旧石器時代はあまりないんですね。「ヒト」となんて言わなくても良いんです。「アイヌ」の人達が北海道や樺太にいます。「アイヌ」というのも実は、「ヒト」という意味なんです。それからアメリカ大陸の北極の方に近いところに生活舞台を持っている「エスキモー」の人達、「エスキモー」というのは後でヨーロッパの人達が付けた名前なんです。あだ名なんです。『生

肉を食う人』と言う意味の…。ところが自分達は「イヌイット」と言います。これも「ヒト」と言う意味なんです。世界中のどんな集団を見ても自分達を「ヒト」と呼んでいるんです。それはどこからきたかと言うとこういうこと（縄文時代の始まりから…）なんですね。そのきっかけは「ちゃんとした定住」という事があって、「俺達『ヒト』は動物とは違うんだ」という…、そういう意識、これが重要な点です。

その後ですね…、「自我」という自我意識と、これと人間意識とはちょっと違うんですね。自我意識というのは「自分と自分以外のヒトとの違い」、「自分はヒトとは違うぞ、他人とは違うぞ、俺は俺だぞ」という…、そういう意識が自我意識なんです。これはヨーロッパの近代から非常にこう芽生えてくるんです。あまり日本人にはそういう自我というのは出てこない。むしろ、人間意識というようなものの中で、ほんわかとした世界が続くわけなんです。それはそういう意味なんです。それからですね、またちょっと戻りますが、「そういう人間意識を持って村を営む、そして、ムラというのは人間同士が営む場である。」と…。そして人間同士の生活が行われて、そこに社会的というような概念と言いましょか？そういう出来事が新たに出てくる。堂々と表立ってくる。昔は自然の中に埋没していた（溶け込んでいた）のに、そうじゃないというのは、縄文時代でムラ社会が開ける（出来上がってくる）。

黒浜貝塚に例をとりますと、ただ「ココが俺達の住む場所だ」と言って、そこに（市役所の脇）ですね場所を決めただけじゃないんです。ココに住むためには、そういった社会的な生活をするためには、この場所をどのように使っていくのか？それは、その場所の使い勝手だけじゃなくて、その場所に住み続ける縄文人同士の決まりごと。そう言うものが段々出てくるわけなんです。それは私達は、どういうふうに細かい決まりごとがあったのかと言う具体的なことはもう知ることは出来ません。けれどもそれはですね…、あの黒浜貝塚が…、中に残してくれている「竪穴住居」の配置だとか、貝塚がどういうふうな形でこう廻っているのかということを見ていくとですね、段々全貌は分からないにしても、粗粗（あらあら）の枠組みみたいなものが浮かび上がってくるんです。で…、結論から言いますと、黒浜貝塚というのは、決して黒浜貝塚だけにしか見られないということではなくて、当時の縄文時代の仕組み、村の作り方、と教則があっているんです。全然飛び跳ねた事をしてません。決まりごとが守られている。どういうことかと言うと、面白いのは、竪穴住居はですね…、こう手をつないで輪を描くように、分かりやすくいうと廻っているんです。全部手をつなぐというと沢山の竪穴住居が必要になりますけど、そんなに沢山はないんです。じゃあ何軒くらいあったかと言うとなかなか難しいんですが…。あんまり言い（説明し）たくないんですけども、マアマア黒浜貝塚で10軒ぐらい、あってせいぜいです。そうすると10軒が展開すると、輪を描くということになりますと、所々空くんですね。空いてるけれども、好きに何かの時には（空いている場所に）これ（家）が出来て、これ（家）が無くなった時にはココに（家が）出来たり、というような…、どうも彼ら（黒浜貝塚の縄文人）は、ちゃんとした絵を描いてなくて、途切れ途切れになっているんだけど、実はよ〜く見ると、点線で結ぶと円になる。それから、どうも『円』を意識している可能性がある。単なる意識と言うことではなくて、おそらく彼らは「世界感」と言いましょか？「俺達の世界」あるいは、「自分たちの頭の中に描いた世界」、「生きているこの世と言うのは丸いんだ」というですね…、意識と言うものがあつたんじゃないか？これは非常に縄文



(時代)の特徴です。と申しますのは、他の諸外国のですね、色んな歴史上のものをみていくと、『真丸くなるというのは、そういう例は縄文だけじゃないんですけれども…、どこでも真丸という訳ではないんです。』1列にズーと台地の縁(へり)に点々と並んでいくの(例)もあるんです。あるいは、2列もあるんです。その2列の場合向き合って2列の場合と、ちょうど前後(交互)で2列の場合もあります。

「トーテムポールを立てた人達」は面白いんです。本格的な農耕は持たないのに身分差があったんです。で、身分の低いヒトは川縁にズーと家を建てるんですね。で(身分の)高いヒトは後ろに建てるんです。どういうことを意味しているかと言うと、しょっちゅう争うんです。人間というのは今でも争ってますけれども、縄文時代から争ってまだ、争いというのはつまらない。悲劇しか生み出さないものだと言う事を知りながらも、止められないんですね。あれは困ったものですが、「トーテムポールを立てた人達」も、おそらく縄文(人)も戦争をしてたんです。「トーテムポールを立てた人達」なんか凄いですよ。もの凄い殺戮をやっています。その攻めてくるのは川をずっと夜陰に乗じて来るんです。だいたい「俺はここにいるぞー！」なんて、日本の歴史の上でも戦国時代の非常に限られた戦争の仕方です。大体は騙したり、不意打ちを食らわすほうが効果が出るに決まっていますから…。「トーテムポールを立てた人達」も不意打ちします。「夜襲」で、あるいは「朝駆け」で…。その時ボートで近づいてくるんです。要するに川が使われている。で川縁で生活というのは、営まれている…、川は非常に大事な場なんですけれども、ここ(ムラ)にやってくる敵も実は川からやってくる。攻撃を受けるのは川縁に、一番前線にいる人達です。そこを襲撃されるとですね「危ない！」ということで、後ろの身分の高い人達は皆、逃げていくんです。そういう仕組み、だから「円(マル)」というのはですね、縄文時代のことだけを見ていると、その個性というのは、その意味合いというのは、浮かび上がって来ませんが、その世界の歴史をこう見ていくと、「これはこれで縄文人の特徴なんだ。縄文人の縄文社会が生み出した1つの形なんだ」という事が分かってきます。それは『なんとなく円になったんじゃない』ということです。それにはちゃんとした信念といひましようか？世界観があった。という風に見るべきだと言うことです。これには色んな考え方がありまして、『円があるということは、ここ(その中)に中心があると言う事も、暗に円の中には中心がある。』と言うことを知っているんです。だから、円の、円周上に並ぶという事は、この円周との関係、円の中心との関係と全部等間隔なんです。だから、(こう)それぞれ離れているみたいなんですが、中心があるとそこから等間隔で、平等に展開している事を表す一つの象徴的な出来事(形)という風に見ることが出来るんです。これはですねその後に、『ストーンサークル』。これもズーと石を円く並べているんですね。「たまたま、円くしたんじゃない」。ムラの形が円いという事と『ストーンサークル』が円くなっているという事と、皆関係あるんです。だから、極めて重要な『円』というのは、世界観と、縄文世界観と…。円はその後「円滑に…」とかそういう言葉にも出てくるように、非常に、まあ、何と申しますか、それぞれ差別のない、1つの世界を創る象徴的な形ということが出来ますが、こういう風にして見ていくとですね、その他に黒浜貝塚は、貝塚を円周上にしているんです。(おそらく…)、だから貝は食べ物を、食べ物としての貝を殻まで食うこと出来ませんから、先程も市長さんと話しをしていたんですが、子供の頃は貝塚の貝を採ってきて…。あれ(貝塚の貝を採る事)は『盗掘』と

言うんです』。(参加者笑い)。文化財保護法でいうとですね市長は『盗掘』して遺跡を破壊して  
たんです。(爆笑) まあ、しかし子供で正しい事の判断がおぼつかなかった。ということに免じて  
許す事にしましょう。まあ、しかし事実は大変な事をしていた。しかも罪の意識もなくニコニコ  
話をして…。(爆笑) しかしそれは、免じて許す事にし、条件の一つに組み入れても良いんで  
すけれども…。まあ、そういうやつ、貝を捨てるとき、またこれも円くしてくんですよ。だから、  
それをですねそういう意味で世界観と関係あるんですよ。と私は強調したいんですけども、  
僕がそういうことを言うんですけどね、「小林のいうのは間違ってる。たまたまそうなんだ。」  
という事を言う若い人がいるんです。で…。、「僕はまあそういう人と、僕は大人ですから喧嘩  
はしませんけれども…。」。「新聞にまで出して小林の考え方はおかしい。〇〇新聞はですね、  
私の名前を引き合いに出して、『小林はそう考えてる』んだって…。最近の研究によれば…。」  
って、いかにもあれでしょ、僕が遅れた研究をしているみたいに…。本当にね腹が立つんです  
けれども、私は(円くなる事は)偶然じゃない。あるいは偶然じゃないというよりは、縄文人  
が円くしたというのにはちゃんとした意味があるんですよ。「世界観」そういったものと係わり  
を持っているんですよ。という事を強調したい訳ですね。縄文人を縄文人が自ら、「俺達はもは  
や動物ではない。」と言った人間意識というものはこういったところにつながってきているんで  
す。「サルがたまたま石を並べた訳ではないんです。」そう言うことをちゃんと考えてやらない  
と、何時までも遠い昔の我々とはちょっと違って、知能が遅れてと言うような見方を、口には  
出さないけれども、考える時についてそういう様に考えがちなんですね。だから、それは止めて  
もらいたいという風に思うんですね。僕は…。貝をこう(円く)捨てるんです。

ところが黒浜貝塚にはこれが『重要な事実』が1つ隠されているという事がですね、若い人  
たちの研究で発見しました。(ムラの)真ん中をもしかしたら、掘り窪めてですね、土だとか邪  
魔物は、貝も実は食べかすですから…。食べかすをそのまま辺りに散らばらせるのではなく  
て、ちゃんと捨てるんですが、それを丸くするという事を…。それだけじゃなくて、もしかし  
たら、ここ(円の中心)を掘り窪めている可能性もあるんです。意識的にですね「今日はみん  
なで出てきてボランティアで、ここ(広場)を綺麗にしようじゃないか。」というような事で、  
スコップを入れて一生懸命掘るといようなことではなかったかも知れませんが…。し  
かし、部分によってはですね、平らにしようという…。平坦にする…。とか『削る』という  
事までこの(黒浜貝塚の)真ん中をやって、広場を確保する。そして広場の廻りを円く囲うと  
いう、ここまでずーと考えていくとですね、大変な事実が浮かび挙がって来るんですね。ただ  
あそこに貝を捨てただけじゃない。貝を捨てるには円くする事も意識した。そしてここ(中央)  
は広場として使用するためにしよっちゅう掃除をしているから、ココを掘ってもあまり出ない  
です。モノ(遺物)は…。黒浜貝塚だけじゃないんです。黒浜貝塚でも全てを掘っているわけ  
ではありませんが、色んなところのデータからも色々な事が浮かびあがって来ていますから。  
同じような形を外見状採っている黒浜貝塚もきっとそうに違いない。そして、中央を広場とし  
て掘り窪めると周囲は土手状に盛り上がるんですね。これも非常に大事な事です。盛り上がる  
という事(盛り上がって見えるという事)は目立つ事で、ムラの(黒浜ムラの)形というもの  
がひとつの形として段々目に見えて自然の中にはない新しい形を作り上げていくんです。今ま  
ではそういうことは、後期とか晩期という5番目と6番目の(晩期というのは「お晩でござい

ます」の晩ですが)、縄文時代の一番お終いの時期が晩期ですが…、その頃にこういうものが作られたんじゃないかといわれていた…。土手みたいなものですね。ところが『そうじゃないぞ』というのがですね、この黒浜貝塚は3番目の時期(前期ですが…)、草創期・早期・前期・中期…と続く3番目の時期が黒浜貝塚の時期なんですけど、もうすでにココで始まっている。もしかしたらですよ!黒浜貝塚だけが1つ飛びぬけてそういうことがやったという事ではないかも知れませんが…。少なくとも土手を(円い土手状に)、土手状に見えるようにムラの真ん中を作っている。外側を廻らせ始めた先頭グループの1つであったというのは間違いない。で、それだけの力を「黒浜人」はですね持っていたという…。でこの土手を廻らすということは、石を並べたストーンサークルに通じていくんです。そしてある奴は「巨木」を10本ぐらい並べるといふものにも通じていくんです。みんな円になる。こういうことを考えるとですね、黒浜貝塚というのは相当「縄文文化の在り様」といいますよ、それを考えていく時にですね、極めて重要な鍵を持っている。しかもそれが先頭に立って、黒浜貝塚だけが(あのこの間Qちゃん(高橋尚子)に勝った土佐礼子みたいに独走したんじゃないかも知れないけど、先頭グループにあったというのは確かです。それより古いものはないですから…。しかも前期の(3番目の時期の)黒浜貝塚と同じ時代のものを見ていっても、黒浜貝塚でしっかりと確認できているものは、他にはないですから…。しかし、全く無いとは言いきれないので『先頭グループ』とココで言うておきますけれども、これはもう確かでしょう。しかも重要な事はですね、そういうことを意識してみないと見えないんです。だから、結果的に発掘したら解ったとかいうだけではなくて、発掘しても解らないという人がいたり、発掘しても今の私の考え方に反対する人もいる…。これはだから面白いですね、研究というのは…。研究というのは積み重ねていけば、そのデータといひますよ、その証拠がものを言うてくれるのではなくて、「こうではないか」という予め予想をしておくという風に見えてくるんです。予想してないと見えてこない。逆の予想をするとみんな逆に見えてくる。そうすると研究というのは、その人(その研究)と関わりを持ってくるんです、人間性と…。ちょっと蓮田の職員(田中さん)を持ち上げるために言うてですね、哲学を持っているんです。これはやっぱりそういう気概がないものは見えてこない。

こういうことが解ってきた。だから私達はですね、この黒浜貝塚を見るときに、今の状態だけで残しておけばいいのか?そういう彼らの世界観がこういうところに現れているぞという事を表現して、「なるほどそうだな」と見て解るように整備したらいいのかというのは、この辺はこれからの大きな課題になると思いますね…。しかも、黒浜貝塚のもうちょっと個性を申しますと「貝塚を持っている」んですね。貝塚を持っていることそれ自体がですね、ここにじっくりと腰を据えて生活をしていくぞという事を良く表しています。あれだけの貝は一晩や二晩で、1ヶ月や2ヶ月で消費するものじゃないんですよ。貝だけ食べてたら本当に見るのも嫌になるでしょうね。だから長年の積み重ねがですね『貝塚』として残されているわけです。その貝は直ぐ今低くなっているところに生息していたんですよ。つまりあそこに海水が入っていた。この辺まで…。もっともっと奥までですよ、栃木県の方だと小山市の辺りまで海水が入っていたんです。先程もそういう話をチョットしていたんですけど、旧石器時代は氷河時代。氷河時代というのは寒いんですよ。この辺(蓮田)で日光の戦場ヶ原ぐらいの気候。気温が年平均6℃

ぐらい低いというところ（戦場ヶ原）ぐらいになるんです。そうするとこの影響は、ここ（蓮田）と日光だとか、信州の北アルプス、南アルプスと比較するよりももっと高いところがあるんですよ地球上には。エベレストだとか、ヨーロッパの方でも。そういう高山地帯には氷河が発達しています。今でも…。そういう氷河は地球上の水分を氷として閉じ込めておく。寒いから…。ところが暖かくなると溶けてくるんです氷が…。で、地球上の水分（水）は一定してるんです。だから、氷で閉じ込められると、或いは北極の方で氷山になって氷になってると、水はみんな閉じ込められますから、その分ものすごい量ですから、海面がものすごく低くなるんです。（海面が）低い時代から段々暖かくなって、縄文時代になって温暖化していくと、その氷が段々溶けていきます。その分どんどん海面が上昇します。調子に乗るんですよ。地球上の色んな出来事は、人間だけではないんです。自然もそんなんです。そのこんなに寒かったのを経験した地球上の気候はですね、暖かくなると調子に乗ってずーと暖かくなるんですよ。暖かくなって最高潮にまでなかなかブレーキがかからない。一番暖かくなったのが黒浜貝塚が営まれたようなその時代なんです。その時にいっぱい氷が溶けて海面が上昇しましたから、今の東京湾なんかには留まっていられないで、谷（溪谷筋）を上ってきたんです。これを『縄文海進』と呼んでいます。世界的にもその名前と呼ばれています。『縄文海進』と…。

その縄文海進の現象がそこ（黒浜貝塚の脇の低地の部分）に貝が生息していて、それを獲っていた。これも実は関東地方の縄文時代前期、3番目の…。縄文時代は草創期・早期・前期・中期そして後・晩と続きますが、その3番目の関東地方前期の縄文人の開発精神「俺達は貝に目をつけたぞ」と…。この貝をですね、そして浅い入り江になっているわけです（この周辺は…）。だかた獲ろうと思えば採り易いんです。イチイチ沈没して（潜って）獲らなくても良いんです。ずーと沖の方に行くんですね、潜ってアワビとかを獲らなければならないが、この辺だったら良いんです（大丈夫なんです）。そういう事があって関東地方の人達は、貝に目を付けるという関東地方集団の自発的な先見性といいませんか？それが見られるわけです。その中でも黒浜貝塚がまた面白い事を発見してくれました。それはですね、ここに入り込んでいる（今日入って来る時、或いは見落とした人はもう一度見直してください）、それからこのパンフレットにもあります。『硬砂層（かたすなそう）』というのがですね、あのところ（黒浜貝塚の斜面部）にあるんですね。その硬砂層にカキがくっ付いているんです。どうもですねカキというのはそういう所に付着している方が心地良いんですね。硬砂層をちゃんとカキの生息しやすいように、縄文人が手を加えているんじゃないかと。というのがここ（黒浜貝塚）の研究の成果なんです。これも大変重要な事です。今までそんな事を誰も言っていません。誰もというとは少し違いますが、昔酒詰仲男先生という方がいて、「カキは養殖されたんだ」。縄文人はすでにカキを養殖していたということを考え方として出されていた。しかしその証拠にですねあの硬砂層をちゃんとカキが生息しやすいように縄文人が手を加えているぞという事を証拠を挙げて、それ（硬砂層）を証拠としてはっきりと言いだしたのは黒浜貝塚の研究成果なんです（「蓮田グループ」なんです）よ。（蓮田研究者グループの成果です）。ただデスクに座って役所仕事をして、嫌々課長に監視されてやってたというだけじゃなくて、（笑）そういう事（「硬砂層がカキの半養殖に利用されていた」ことも検討・研究していた）もやっていた。ということで大変重要な事です。そういうものもみんな含めて国の史跡に重要なものとして指定して、将来にも残

さなければいけないというところまで来ているわけです。

黒浜貝塚もここだけを見るだけではなくて、人類の歴史の中で、そして自然と人間との関わりの中で、そして一方では全国的な縄文文化全体のうねりの中で、黒浜貝塚というものがどういう位置付けにあるのか？ということは皆さん相当今日ご理解いただけたのではないかと思います。

それから、もう少しお時間を取らせていただき、付け加えておきたいと思いますが、ムラというのは非常に重要なものです。自然の一角を人間が切り取って、独占して、そして都合の悪い奴をみんな追い出して、村の形、今でいうと「東京都」みたいなものを造るわけですよ。人工的な…。その走りですね。自分たちの生活の場を人工的に整備していく。今だったら「都市計画」というような言葉がありますけれども、ちゃんと『ムラ計画』があって、それには1つの世界観みたいなものがちゃんとあって、それが「円く堅穴住居が並ぶ」とか、「貝塚を円の線上に置く」とか、「土手を円くしていく」とかいう事に加わってきている。ということです。そしてそれはですね、私達がもう少し縄文人の立場で色々考えてみますとこの堅穴住居に寝起きしていた人が朝起きて出ると、仲間があちこちで大欠伸をしていたりするのが見えるわけです。それでこういう近景（村の風景）があって、村の外には「ハラ」がある。ここには自然がたっぷり残っている。そうやってムラの中の近景とですね、ハラの中景と全然違った様相を意識する事ができます。だからこの時ですね、私（僕）はどうもムラの内とムラの外ハラという『内と外』という言葉も生まれたんだろうと…。言葉というものは人のあだ名1つとってもわかるでしょう。例えば「カマキリ」といえば、ただ「カ・マ・キ・リ」という音の響きが面白いからと言ってある人にあだ名を付けるのではなく、カマキリのような顔をしてたり、カマキリのように時に獐猛な性格をチラつかせていたり、というような人に「カマキリ」という名を付けたりして、だから「カマキリ」というあだ名1つにも意味がある。そういうふうにして『内と外』というような言葉が生まれたのは、村を作ってからだろうというふうに考えています。縄文人はまだ言葉がありましたか？という話（質問）を聞くんですね。私は堂々と答えたいんですけども、我々と同じくらいに日本語を操っていましたから…。

例えば「万葉集」は8世紀にできたものですが、その万葉集のあの歌、あの巧みな言葉を操った素晴らしい歌はですね、8世紀に在った日本語で、8世紀に出来た言葉だとは誰も思わないでしょう？その前からあったからあれだけの歌が詠えるわけです。じゃあ、おじいさんの代？曾おじいさんの代？かといったら、そんな代ではあんな言葉は出ないでしょう。あつという間に古墳時代、弥生時代と入ってしまいます。そこを抜けると縄文時代です。しかも1万年という縄文時代がある中、手振り足ぶりですね、目配せだけで生活なんてしていませんよ。日本猿だってちゃんとした言葉を持っています。下北の猿も丹波笹山の猿も交流は無いですよ。けれどもそれぞれにそれなりの言葉を持っています。それなりの遺伝学的な、生物学的な、能吏を（脳に）もっているんです。だから人間も持っていたはずですよ。人間はもっと霊長類のサル仲間よりも言語中枢は発達しています。それから2本足で立つことによって、のどが非常にゆとりを持ってくるんですね。だから発音は自由自在なんです。何故サル達が沢山の言葉を持っていないかという発音できないからです。ところが人類は悠々と生理学的に可能にできましたから、日本語には日本語の発音、韓国語には韓国語の発音が出てくるわけです。そして

それなりの言葉が生まれてくる。だから日本語というのも、万葉集なんかも実はついこの間できたんじゃない。万葉集が出来上がる何世代か前ではなくて、そのずーと前に出来ていて、段々…ということになると縄文時代にはちゃんと在って、今申しましたような俺達はもう動物じゃないんだぞという自分たちなりの世界を作った時、ムラから出るとそれは「ムラの外」である、「ムラの内」であるという事を私はもう創ったと思っています。そしてこのムラというのは、「ムラ」、そして「ハラ」その向こうには「ヤマ」が在って「ソラ」がある。「ラ・ラ・ラ」と…。「ラ・ラ…」というのは歌う時の「ラ・ラ…」じゃないですよ。(笑) 同じ時に同じ様な視点で言葉が出来ているという事です。今の私が…、私は非常に良い発音ですけども、その発音かどうかはチョット疑問ですけども…。似たような言葉があったはず。「ラ・ラ…」という。で、『内とか外』はですね、必ずあったに違いないと見ていくと、私は縄文人が段々身近に感じられるんです。

黒浜貝塚のあのムラの中で、その外は、ソトなんだということ、もう言葉でも、「外と内」という事も解ったぞ。これはどういうことかということ「竪穴住居」もそうでしょ。竪穴住居というのはムラの内にあるものですけども、竪穴住居から見ると内の外なんです。ムラにいて、暗くなったので背を屈めて竪穴住居に入ると、そこは竪穴住居(家)の内なんです。だから、『内と外』というのは、非常に重要なのはムラというものが創られた時、成立した時に、どうも「外」と「内」というような言葉と概念も出来上がったんじゃないか？そうやって日本語というのがどんどん形を作り、言葉自体も多くなっていく。言葉数も多くなっていく。今何故付け加えるかということ、その時の彼らの抽象的な思考、目で見て、みんなが目で見ることが出来ることを相手にしたり対象にしたりして、ものを考えているのではなくて、「外」と「内」というのは、ムラの『内と外』だけではなくて、竪穴住居の『内と外』でもあるし、それから「土器」もそうですよ。土器を彼らは作りました。土器の中(内)に物を入れたりする。で、(土器の)外に出す(中のものを…)。この器(土器)の世界にも『内と外』があり、竪穴住居にも『内と外』があり、村にも『内と外』がある。そういうふうに言葉というのはちゃんと定着していくんです。

1 万年の縄文時代というのは、単なる私達の歴史の謎の深い、霞の彼方にある存在ではなくて、今の我々の日本語にも通じてくるような言葉はすでに芽生えていて、そしてそれがずーと来ている。その状況証拠としてムラというのも非常に大事なんだということです。で、1つだけそれに関連して「ノラ(野良)」というのがあるじゃないですか？「ノラ」も「ラ」でしょ。だから同じような視点で「ノラ(野良)」という名前も付いたんですよ。というのは「ノラ」というのはですね、実は「ムラ」とも違うし、「ハラ」とも違うんです。「野良仕事」と言う言葉があるように「畑」とか「田んぼ」なんです。耕作地(農作地)なんです「ノラ」は…。だから「ノラ」というのは弥生時代以降に出来た言葉なんです。問題は「ハラ」とも違う、「ムラ」とも違うということ、しかし見方を変えれば「ムラ」と非常に近い意味を持っています。つまり、自然を排除して自分達特有のですね、都合の良い空間を確保したもの、それが「ノラ」です。雑草があれば取り除く、「ムラ」の中に木があれば邪魔だから取り除くのと一緒です。虫が来れば追い払う。野鳥は害鳥になる。イノシシが来れば作物を荒らす害獣になる。同じことをやっているわけです。ムラの中と…。

だからこれは非常に重要な事で、日本列島の旧石器時代というのは人類の歴史の第1段階なんです。『遊動的な生活』というのは（サルやチンパンジーやゴリラと似ているというのは）、人類の文化の第1段階。『縄文革命』以降が第2段階なんです。人類全体の生活の中の第2段階にあるということで、黒浜貝塚もその中の典型的な第2段階の生活・文化の根拠地であった。というふうにご理解いただければありがたいと思います。もうチョットね（少し詳しく説明すると）、第1段階の旧石器時代ではほとんど同じなんですが、第2段階になると定住しますから、日本列島には日本列島に定住する生活習慣が、ずーと伝統的に続いていくとですね、今度はあまり外に出ないんです。定住というのはその場所で活動範囲が半径5kmぐらい、それで十分なんです。世界中のそういう集団を見ていると…。で、その中で終わりますから、ほとんどのものが足りていますから、それで足りないものは、今度は交易ですね。モノの交換だとか。そういう物によって無いものを貰ったり、情報を交換したりしながら、『縄文ネットワーク』がずーと張り巡らされていくようになる。そしてそれが「縄文言葉」の範囲になって、ちょうど日本列島全域を被っていくんです。北方4島も申し訳ないけど縄文言葉が入っているんですよ。樺太は入っていないです。だからあれはお返ししても良いんですけど、4島は何としても貰わないと困る。(笑) 沖縄もあんな遠いところでもちゃんと入っているんです。何故わかるかと言ったら、『翡翠（ヒスイ）』というのがあります。『翡翠』は新潟県の糸魚川という所でしか取れないんです。硬くてどうしようもない奴なんです。加工するには…。ところが、あれを無理して加工して玉にするんです。勾玉のようなものも作ります。それが行くんですよ沖縄まで。なんで？それは『翡翠』というもののブランドについての観念が、ちゃんと行き直っているからです。観念はものを見てもわかりません。色とかはわかるかもしれない、形はわかるかもしれない。色と形だったら似たような石がいっぱいあるのに『翡翠』にこだわるということはですね、目で見て確認できないような事が、付加価値としてそこに被さっているからです。それは何でかぶす事が出来るかといったら言葉ですね。だから『翡翠』が入っている所というのは、縄文語（言葉）が入っているんです。朝鮮半島に入っていないです。行くのは古墳時代に入ってから…。いっぱい向こうは力を持ちますから、日本の国内では出ないような良い『翡翠』を持っていっています。これは力関係です。だから、それまでというのは行ったり来たりしないんです。沖縄まで行ったり来たりしているのに、朝鮮半島には行ったり来たりしないんです。それは言葉が通じないからです。それから樺太は行ったり来たりしないんです。同じ土器を持っているのに行ったり来たりしない。それは言葉が通じないから。津軽海峡はいつもあそこを挟んで1つの同一の文化圏です。行ったり来たりしています。同一の文化圏というのはいつも嫁さんが行ったり、婿さんをとったりやっている仲間なんです。それは言葉が通じるからなんです。航海術の差ではないんです。言葉がどこまで共通していたかということの意味する訳です。そういう事から言っても縄文時代には既に「縄文言葉」があったということが分かる訳ですね。

これで最後にしますがけれども、言葉を彼らも持っていたということに（考えることによって）、相当縄文人と我々との距離は狭まったはずなんです。私との距離もですね、おかげさまで狭まったと思います。(笑)

ということでご静聴ありがとうございました。

